

# 地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発：平成23年度報告書

著者	土岐 篤史, 上原 美穂, 川口 智美
ファイル(説明)	[奥付] 資料集 おわりに 第5章 第4章 第3章 第2章 第1章 はじめに 巻頭言 目次 [表紙・標題紙]
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/17378">http://hdl.handle.net/10232/17378</a>

# 第3章 ネットワーク配信システムの 試験的運用

## 第1節 目的と方法

### 1) 目的

平成23年度は、平成22年度に活動した地域との連携強化を目指し、デリバリー方式による支援活動を継続することとしたが、それと並行して、遠隔地における支援機会の確保や大学院教育への連動を意識した試験的方法の検討を行った。

今回、ひとつの試みとして、遠隔地と大学をインターネット回線でつなぐネットワーク配信システムを採用した地域支援活動を行った。

### 2) ネットワーク配信システムの概要

ネットワーク配信システムは、インターネット回線を使用したコミュニケーションツールである。ネットワーク配信システムにより、物理的距離という制約を乗り越え、情報の即時的共有を行いながら、フェイス・トゥ・フェイスの意見交換、および、ディスカッションが可能となる。

大学側の使用機材(3-表1)は、鹿児島大学総合教育研究棟7階スーパービジョンルーム3に設置した。スーパービジョンルーム3は、20人程度が入れるスペースとなっており、設置された大型液晶(50インチ)に接続先の様子が映し出され、机上の会議用マイクスピーカーを通じて音声を聞くことができる。一方、地域側の使用機材(3-表2)は、ノートパソコンを中心に携帯可能なコンパクトサイズである。地域側では、ノートパソコンを通して、大学側の映像と音声を共有することができる(そのため、地域側への配信は主として音声になる)。

なお、本システムはインターネット回線を使用しているが、専用ソフトウェアを介して、情報保護の対策が施されたシステムとなっている。

### 3) 対象地域の選定

今回、ネットワーク配信システムの試験的運用をするにあたっては、平成22年度に活動を行った地域の中から、すでに本研究科と連携が深く、今後の支援活動を展開しやすい想定された伊佐市を選択することとなった。また、地域と大学をつなぐネットワーク配信システムを活用する際、双方の関心が高くコミットしやすい内容であることが望ましいと考えられたため、児童虐待に関する事例検討会をネットワーク配信システムの試験的運用の対象とした。さらに、今回は個人情報保護の観点から、模擬事例検討とした。

#### 4) 試験的運用の実際

##### ①ネットワーク配信システムの試験的運用および模擬事例検討会の趣旨説明

##### ②アンケート記入（前）

模擬事例検討会およびネットワーク配信システムの試験的運用の効果と課題を検討することを目的とし、模擬事例検討会の前後に大学院生を対象としたアンケートを実施した。

##### ③事例検討会議のロールプレイ

###### 【伊佐市側】

架空の虐待事例を想定してシナリオ作成を大学側で行い、伊佐市福祉事務所の職員を中心とした有志と土岐准教授が模擬の事例検討会議をロールプレイ形式で進めた。演者は、市福祉職員、市保健師、児童相談所職員、警察署員、施設職員、病院医師といった役割を執った。会議自体は演者の主体性に任されたため、演者は、それぞれの豊かな経験を活かしながら、役割に沿って架空事例に関する発言を行い、時にはアドリブも交えながら演じていた。その他の参加者は、聴衆として模擬会議の様子を観察していた。

###### 【大学側】

学生は、ネットワークシステムを通じて配信される事例検討会議を視聴しながら、事前に配布された虐待チェックリストや相談受付票に記入を行い、事例への理解を深めた。

##### ④グループディスカッション

###### 【伊佐市側】

ロールプレイ後は、小グループでのグループディスカッションを行い、各グループの発表と全体共有を行った。

###### 【大学側】

服巻准教授が事例に関する補足説明をしながら、学生も小グループでのグループディスカッションを行った。その後、伊佐市でのグループ発表を、自分たちの意見と比較しながら聴いていた。

##### ⑤アンケート記入（後）

ネットワーク配信システムによる模擬事例検討会に参加し、気分がどのように変化したか感想とともに回答を求めた。

3-表 1. 大学側使用機材

製品	品名	型式	メーカー	個数	
デスクトップパソコン一式	Windows Vista	HP Compaq dx7400	HP	1	
	(ワークステーション本体)	SFF			
システムソフトウェア一式	テレビ会議基本ソフトウェア	CONET Collaborator	CONET	1	
	接続ライセンス 1 本	CONETCOL1020			
オプションソフトウェア一式	サイバーカンファレンス EV ソフトウェア	PDA-S08CBL	Pioneer	1	
周辺機器等 一式	マイク	会議用マイクスピーカー	PJP-100UH	YAMAHA	2
	カメラ	コミュニケーションカメラ	VC-C50i	Canon	1
	ルータ	ギガアクセス VPN ルータ	RTX1200	YAMAHA	1
	ディスプレイ	プラズマディスプレイ	PDP-507CMX-JP	Pioneer	1
		ハンドライティングデバイス	PDK-50HW4		1
	キャスター付 ディスプレイ台	キャリアブルスタンド	PDK-MC01		1
		棚板	PDK-MC01T		1
テレビ会議用カメラ置き台		OV-08A	1		

3-表 2. 地域側使用機材

製品	品名	型式	メーカー	個数
ノートパソコン	ThinkPad	4058-CTO	lenovo	2
マイク	会議用マイクスピーカー	PJP-25UR	YAMAHA	2
ビデオカメラ	HD ビデオカメラ	iVIS HF S11	Canon	2
望遠レンズ	ワイドコンバーター	WD-H58		1
USB キャプチャーユニット	USB キャプチャー	DC60	EasyCAP	2

## 第2節 結果

模擬事例検討会の前後に実施したアンケートでは、ネットワーク配信システムによる模擬事例検討会に対する満足度、気分の変化および感想を調査した(n=14:男性1,女性13)。満足度については、「大変満足」「まあ満足」「どちらでもない」「あまり満足していない」「満足していない」5件法にて回答を求めた。気分に関する9項目(活気・緊張・のどか・そわそわ・やる気・不安・充実・動揺・平静)を設定し、「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5件法にて回答を求めた。それ以外に感想を自由記述にて尋ねた。以下に結果の概要を記述する。

### 1) ネットワーク配信システムによる模擬事例検討会の満足度

満足度は、「大変満足」が5人/14人中(36%)、「まあ満足」が7人/14人中(50%)、「あまり満足していない」が1人/14人中(7%)、未回答が1人/14人中(7%)であった(3-表3)。

3-表3. ネットワーク配信システムによる模擬事例検討会の満足度

	パーセンテージ	人数
大変満足	36%	5人
まあ満足	50%	7人
どちらでもない	0%	0人
あまり満足していない	7%	1人
満足していない	0%	0人
未回答	7%	1人

### 2) 気分の変化

気分に関する9項目(活気・緊張・のどか・そわそわ・やる気・不安・充実・動揺・平静)について、各評価を「とてもそう思う(5点)」「少しそう思う(4点)」「どちらでもない(3点)」「あまりそう思わない(2点)」「全くそう思わない(1点)」として数値化し、模擬事例検討会の前後の平均点をt検定を用いて比較した。その結果、「不安」と「充実」の項目において、検討会前と検討会後の平均値に有意な差が認められた(3-表4)。このことより、検討会の前後で学生の不安感が低下し、充実感が高まったことが明らかとなった。

3-表 4. ネットワーク配信システムによる模擬事例検討会前後の気分の比較

	前		後		有意確率 ( <i>P</i> )
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
活気	3.29	1.14	3.71	.91	.234
緊張	2.43	1.02	2.29	.61	.612
のどか	2.50	.85	2.64	.84	.583
そわそわ	2.93	1.07	2.57	.94	.336
やる気	3.36	1.01	3.57	.76	.385
不安	2.71	1.14	2.07	.62	.033*
充実	3.14	.77	3.93	.73	.006**
動揺	2.07	.83	1.71	.61	.174
平静	3.71	.73	3.64	.63	.720

(\*\*= $p<.01$ , \*= $p<.05$ )

### 3) 感想 (自由記述)

#### 【リアリティの実感】

- ・ 模擬事例検討会がどういうものか、よく想像できないままに臨んだが、とても現実的で興味深かった。
- ・ 実務上の困難さや課題を知り、そのためにはどのような手立てが可能かを考える非常に貴重な機会であった。
- ・ 実際に現場に出られている先生方が、この事例をどう捉えたかということを知れて良かった。
- ・ このような機会は今までなかなかなかったもので、楽しかった。

#### 【多視点からのケース理解の重要性】

- ・ 他職種の人たちが臨床心理士と同じ視点を持っていたり、異なる視点を持っていることがわかり、とても勉強になった。
- ・ 様々な視点からの意見を聞くことができ、学びになった。
- ・ 全体的にとっても貴重な検討内容を聞かせていただき、ディスカッションでき、満足。
- ・ 少し聞き取りにくかったが、いろんな立場の人の意見を聞いて勉強になった。
- ・ 現場の様々なご意見を学ばせていただけてよかった。

#### 【虐待対応の難しさ】

- ・ 虐待ケースについて、具体的に考え、その難しさを肌で感じた。こちらが支援と誤解していることは本当にその家族にとって支援となっているのか、常に丁寧に考えていく必要があると思った。
- ・ 虐待という問題の裏側に存在する様々な問題(母親自身の生きにくさ、社会資源の無さ、

など) を考え、介入していくことは、難しくはあるが必要不可欠であると思う。虐待の解決に向けて、周囲の問題を十分に見て、広い機関同士の連携を取りつつ、解決しなくてはいけないのだと感じた。

- 全体で1つのケースの支援をしていくことの難しさを改めて感じた。

#### 【システムの不具合】

- 音声が聞き取りにくかったことと、画面のブレが気になった。
- 途中で声が聞こえにくかった。
- 音がもう少し聞きやすかったら良かったなあとと思った。
- 聞き取りづらかったので、貴重な意見を聞きもらして、もったいなかった。

## 第3節 考察

### 1) 地域の「生の姿」を理解する

当研究科は、教育クリニックである附設の心理臨床相談室における学内実習を柱として、2年間で3ヵ所以上の教育・福祉・医療領域における学外実習を含む教育課程を編成している。いずれの施設においても、相談者が自発的に訪れる来談形式によって臨床心理実践教育が行われており、地域支援の実際について知る機会がほとんどない。この状況は、多くの臨床心理士養成を目的にした大学教育機関においても同様だと推定される。

今回の取り組みは、地域支援の実際を大学側にリアルタイムで配信するという方法を通じて、地域支援に関する体験的教育が行える可能性を示している。今回の模擬事例検討会では虐待のケースを扱ったが、「現場の先生方が、事例をどのように捉えたかを知れてよかった」と虐待に際して地域が行う活動の一端を知る目的に適うと同時に、「虐待ケースの難しさを肌で感じた」というように地域で活動する上での支援者の抱える困難をリアルに感じる体験も提供できた。単なる知識的な追求に終わらず、「この事例をリアルタイムでどう理解しよう」「自分だったらどう支援しよう」と大学院生が能動的・主体的に参加した結果、今回の場合、「不安感」の低下や「充実感」の向上につながったものと考えられる。

### 2) 他職種との連携に在り方を学ぶ

今回扱った模擬事例は、多機関、多職種の連携が不可欠である虐待のケースであった。実際、今回の模擬事例検討会には、保育士、幼稚園教諭、教育関係者、保健師、臨床心理士など対人援助に携わっている様々な職種の方々に参加いただいた。こうした形式の事例検討の在り方は、心理職だけで行う場合とは大きく異なる点がある。つまり、事例の心理的な側面だけではなく、虐待の及ぼす影響に関する生物学的、児童擁護に関する社会的側面、家庭福祉に関する側面といった様々な側面から、事例を理解する必要がある。事例に沿って行われるロールプレイや現場の対人援助専門家たちが、それぞれの立場からどのような発言を行っているかを視聴することで、体験的に学習することが可能となる。「他職種

の人たちが臨床心理士と同じ視点を持っていたり、異なる視点を持っていることがわかり、とても勉強になった」という感想からもわかるように、実践に非常に近い臨場感あふれる場面を前にしながらの学習で、大学内にいても各専門家の役割や虐待ケースの対応などについて、実践的理解を深める可能性が示されたと考える。

### 3) 能動的学習のためのフィードバック

今回、地域支援に関心を持っている大学院生は非常に多いことがわかったが、地域支援だけに関心を持っているわけではない。2年という限られた時間の中で、まずは基本的な臨床技能を習得するための自身に必要なと思われる講義、演習、実習を選択しなければならない。ネットワーク配信システムを通して、現場でどのような知識や技能が必須とされるのかを体験的に学習することは、問題意識の明確化、自身に必要なと思われる知識や技能を選択する上で判断材料というフィードバックがかかり、さらなる学習意欲の向上につながると考えられる。

また、本システムを通して、地域を知る機会を得ることが、実際に地域に出る際の基礎となり、現在の学内実習や学外実習で学んでいることへの理解も深められることも期待できる。

今後、ネットワーク配信システムを利用しての地域支援活動を展開していくことで、リアルタイムで地域とのやりとりを経験できる人数が増えるだけでなく、オンデマンドのように録画したマテリアルを加工再生し、情報を共有することができる可能性がある。

今回の試験的運用を通して、大学院生自身も以上のような利点を実感できたことがアンケートにおける「満足感」の高さにつながったものと考えられる。